東西文明の比較(34)

日本は、移民先進国

陽光新聞社・顧問　塩澤宏宣

少子高齢化に悩むわが国は、労働力を補うために海外から「労働者」を誘致することにして法改正もしました。この措置に、将来の「移民」受け入れになるのではないかと、否定的な意見が多く見られます。しかし、私は「移民」受け入れに賛成です。今回は「移民」について述べたいと思います。

今から20余年も前のロサンゼルスでの経験です。ダウンタウンでのこと。大勢のヒスパニックのグループに遭遇しました。びっくりして眺めていたところ、友人(白人系)が、私の胸中を察して教えてくれました。

「彼らのケアは必要だが、彼らの次代の子どもたちは必ずわが国の発展に貢献するだろう」

私は、その言葉を聞いてさすが「移民の国」アメリカだと感心したものです。

※日本は移民先進国だった

「東西文明の比較」をシリーズで書かせていただいておりますが、その初期段階で「縄文」時代の頃を読み返してみました。そこで、その一部を反芻してみます。

約7万年前から1万年前まで続く超低温期。(中略)大陸からは動物群の移動があり、マンモスはシベリア、サハリンを経て北海道へ南下し、ヘラジカ・ヒグマ・野牛などは本州まで到達した。他方、中国大陸北部に分布したナウマンゾウ・オオツノシカ・ニホンジカが朝鮮半島を経由して西日本へ移住した。人類(ハンター)たちはそれらの動物を追って東(現在の日本列島)へ移動したのである。重要なポイントは「アジア大陸からの道」が「シベリア経由で北海道・東北地方へ」と、「朝鮮半島経由で九州・西日本へ」と2本あったこと。そしてこれらの道から移入した文化はやがて関東・中部地方で交わるが、日本列島には二つの文化圏ができる。(中略)13,000年続く縄文時代、弥生時代・古墳時代、そして現代まで続いている。(以下略)

特に最近の研究では、縄文人のDNAが東北地方と関西地方では異なる結果が証明されたことに注目。弥生時代までの日本列島における文化の発展は東北・関東で高い。弥生・古墳時代から九州・関西の文化の進展が高くなっていることは、その時代と大陸交流(移民)の関係が影響している・・・・・。

※弥生人の渡来と稲作の始まり

紀元前8～前3世紀ごろの中国は、春秋・戦国時代でした。このころ、多くの人々が大陸から日本列島に渡来してきました。多分、戦乱を逃れて安定した暮らしを求めて来たのでしょう。先住の縄文人と渡来の弥生人の間には、目立った争いはありませんでした。縄文人たちが渡来人を受け入れ、仲良く棲み分けしていたのでしょう。徐々に人種間の共生・婚姻などが進み、やがてひとつの民族“弥生人”となって、日本人の祖先となりました。

この渡来人は、多くの文化を在来の日本人たちに伝えてくれました。その最大のモノが稲作です。急速に広まった稲作は、「稲穂たなびく豊饒の国、日本」を作り上げました。

稲を育てるためには、豊富な水を必要に応じて取り込み、排水も必要です。灌漑施設の充実です。川の水を引き込む水路の建設には多くの人力の

協力が必要になります。そのためには共通の利害関係を持った集団が必要です。集団を統率するリーダーが生まれ、「ムラ」とよばれる集団ができました。更に多くの道具も伝播しました。鋤や鍬、水田を歩く田下駄（たげた）、石包丁や杵・臼などです。これらの道具はやがて青銅や鉄器になります。これら稲作技術や道具などは、北部九州から始まり、数百年かけて東北地方にまで普及したのです。

☼新日本人＝弥生人の暮らし

弥生時代といえば水耕稲作といわれますが、実態は違います。稲作には凶作、不作がつきまといます。現在もそうですが。そこでどうしたのでしょうか。縄文時代から続くイノシシ・シカなどの狩猟や漁労による魚介類の確保です。更にドングリなどの木の実採集も重要でした。弥生人も縄文文化の重要性を認めていたのです。

弥生時代には、稲作と同様に機織り技術も渡来します。それにより「貫頭衣」（かんとうい）が普及します。弥生人は「おしゃれ」でした。ガラスや碧玉（へきぎょく）、貝などで作られた首飾り・耳飾り・腕輪・指輪などの豊富な装飾品を身につけていました。一部の権力層ですが。

弥生時代の葬送にも特徴があります。北部九州では巨大な甕（かめ）に遺体を入れて土中に葬る「甕棺墓」（かめかんぼ）、土中の甕棺や石棺などの上に大きな平石を置いた「支石墓」（しせきぼ）が発達。近畿地方では 10～15 メートル四方の方形の溝を巡らし、溝の内側に棺を設けた墳丘を作るという「方形周溝墓」（ほうけいしゅうこうぼ）が広まり、これがやがて日本各地へ広まっていきます。一方、東日本では「再葬墓」があります。文字通り二度埋葬することです。一度目の埋葬で骨になった遺骨を壺型の土器に入れて再度埋葬する方法です。

☼続縄文文化（北海道）と貝塚文化（沖縄）

弥生時代、北海道と沖縄は若干異なる文化が栄えていたようです。北海道から述べてみます。

寒冷な土地であるため、当時の技術では稲作の展開は難しかったので、漁労や採集を進化させていました。カジキマグロやイルカ、鯨やアザラシなど大型の魚類や海獣を捕獲するため、高度な道具を開発していました。例えば、「離頭銛」（りとうもり）です。獲物に突き刺さると刃先の部分だけ外れ、獲物の体内に残り、抜けなくなるという強力な武器です。

しかし、彼らは文化の交流を拒んでいたわけではありません。北は樺太、南は南西諸島からもたらされたとされる「琥珀」や「貝殻」などが、北海道の遺跡から発掘されています。これら北海道独自で発展した続縄文文化は、オホーツク文化とよばれる文化へと発展。平安、鎌倉時代まで続いていきます。

一方、沖縄を初めとする南西諸島にも稲作は普及していません。稲の収穫時期の秋は台風シーズンに当たり、米を主食にするにはリスクが高かったからでしょう。しかし、この地方には、それを補ってあまりある海洋資源に恵まれていました。また、彼らには魅力的な産業がありました。豊富な貝殻で作る「アクセサリー工房」です。他の地方では入手できない貝殻で作るアクセサリーと米などの食糧や鉄製の道具と交換して生計を立てていたのです。これを貝塚文化と呼びます。この文化も平安時代まで続いていきます。

一般的に言う「弥生文化」は、厳密に言うと、北海道の「続縄文文化」、本州・四国・九州の「弥生文化」、南西諸島の「貝塚文化」という三つの文化圏が同時に発展していたのです。